

重度心身障害児への人間学的接近

—コロニー七たび，そのまえがき—

村上英治

この年またコロニーに来た。これで7度目である。7年間来る年も来る年も、夏の終りのたびごとに、こうして通いつづけたことの重味を、今じっくりと感じずにはおられない。

序報から第6報まで、紀要に連ねたそのとしどしの体験記録は、まとめて昨年の暮、一本となった。「重度心身障害児 —その生の意味と発達—」と題して川島書店から刊行されたのがそれである。それはそれなりに、こうして重度心身障害児を学びつづけてきた私どもにとっての、一つの一里塚であるといつてよい。

彼らの彼らなりにせい一ぱいに生きぬこうとするその生きざまの中に、人間存在の根源性を見さだめていこうとする視点は、こうしてここにその姿をあらわにすることができた。ひととせひととせ、そこでのかわりかは常に新鮮であり、古くから数度も重ねてこの実習に参加しつづけた仲間、さらにはその年始めてこれに加わった仲間、そのいずれにしろ、そのひとりびとりにとって、忘れ難い刻印を残しつづけてきたものである。

もちろん一方、これで障害児を、その生きる現実の状況の中で適確におさえ、ただちに彼らの自己実現への展開に、援助の手をさしのべることとなり得るものか否かについては、かなりの批判もあることをも、私たちは十二分に承知しているつもりである。この年の実習終えるに当たってもたれた、施設側との反省会での席上、これらの指摘は思いのほか手きびしいものがあった。私たちの実習そのものもつ意図を、たとえ千言万言費して述べつくそうとも、うたいあげようとも、療育の現場には、決してこの種のヨソモノを受けつけないきびしさがある。毎日毎日が、この障害児たちの、また施設職員たちの生きる“くらしの場”であることを、ともすれば忘れてはしなかつたろうか、私たちの自戒はつきるところを知らない。

理念だおれであってはいらない。現実“くらしの場”としての状況がある。その中で私たちが、その療育体制を乱すことなく、介護職員にとっての補助的役割をもないながら、彼ら障害児の内なる世界に分けいり、その発達を支えていく一助ともなり得るために、私たちはいったいどのように動いていくべきなのであろうか。改めて顧みることの要請される今である。

一里塚は一応築かれた。次の一里塚へと向かって私たちは、さらなる歩みをふみ出さなければならぬ。如上の課題ををないつつ、現実の療育状況の中に十分うけいられることをも願いながら、彼ら障害児の中にもともと賦与されているところの可能性を最大限にまで引き出すべく、よりよく生きるための援助をすすめる道づきを模索するその第一歩を、従ってここでまた私たちは、あとづけておきたいと考える。

施設中の子ども、あるいはおとな、その特定の誰かを設定するのではなく、その場に生きるすべての障害者に眼を向ける視点が一つには用意される。いわば拡がりといつてよい。さらにまた、その中のひとりびとりに向って、その内がわ深くかわりつづけてようとする視座は、常にそのありかたを自己へ問うという形で展開されていくべ

重度心身障害児への人間学的接近

きであろう。いわば深まりとあってよい。そしてまた第3に、この年における私どもの最大の課題として、“くらしの場”としての施設の中で、施設を生きぬく障害児者の生きざまを、その関連の中でより深く掘り下げていくことも要請されよう。

昨年度7度目のコロニー実習には、私自身をふくめてまた16名が参加した。大部分は、この種の療育現場での障害児とのかかわりをはじめてもとうとする初心の仲間であった。それらの初心者とともに、この年また、昭和46年をかわきりに、この51年まで、これで六たび参加しつづけてきた後藤秀爾が、また同様48年からはじめて4度目の、讓西賢、江口昇勇が仲間として加わった。

これらの療育実習にかなりの体験を積み重ねたと思われるこの3名に、私自身は従来からの、ひとりびとりの対象児を設定し、それとかがわることを中心にといった参加の様式から一応はなれて、それぞれ若い仲間のスーパーヴィジョンをもかねながら、その担当した病棟の中でかなり自由にふるまうことを容認した上で、この人たちなりの眼でそれぞれの療育の場を、また障害児たちをみつめていくことを期待した。

それらの期待にこたえて、この3人の仲間は、それぞれに自己課題をひき上げて、この年のまとめをと挑戦する。第7報に「拡がり」を主題に障害児群像をとらえる後藤がいる。第8報にこれまでの基本的視座を自らへの問いかけとして深めようとする讓がいる。そして第9報に、障害児が生きる施設の場を問題とする江口がいる。

以下3つの報告は、それらの期待に応えようと、それぞれの体験を重ねた仲間の、自らの責任による単独の記録である。オンニバスの集積して、これを私どもにとっての、第2の一里塚への礎たらしめたいと考える。

付記：昭和51年度のこの実習には、私どものほか次の12名が参加し、かかわり体験を深めるとともに、夜ごとの討議に加わった。この報告もこの12名の仲間の真摯な実習への参加と、熱心な討議なくしては生まれなかったとあってよい。

感謝の意をこめて、以下その参加者の氏名を病棟ごとに記しておくことにする。

北病棟：伊藤義美 鈴木まゆみ 広瀬経子 溝口明子
中2病棟：森田美代子 都築伸子 水野由美子 森山正治
中1病棟：遠藤由里 梅田和子 落合啓子 加藤源王